

金末峰論

——同志社女学校に学んだ一朝鮮人キリスト者の生涯

宇治郷毅

はじめに

- (1) 日本統治下の苦闘
- (2) 韓国最初の女性長老
- (3) 大衆文学作家として
- (4) 公娼廃止運動

はじめに

私は本誌五十二号で、同志社に学んだ三人の朝鮮人詩人、吳相淳、鄭芝溶、尹東柱について簡単な紹介をこころみた。さらに私は、詩人以外で、同志社に学んだ朝鮮の文芸評論家金煥泰、女流小説家金末峰について述べておかねばならない。

金煥泰は、同志社大学予科に三年間（一九二八年四月～一九三二年三月）学んだ人で、在学中、詩人鄭芝溶の知遇をえ、さらに九州帝大

に進んだ。帰国後、海外文学派として文壇で活躍、朝鮮における近代的文芸評論の確立者となった。しかし彼は、一九四〇年、日本帝國主義の苛酷な弾圧下で絶筆、不遇のうちに早逝した。彼には「批評文学の確立のため」に「鄭芝溶論」などの秀れた文芸評論、また「京都の三年」などの回想文がある。

金末峰は私の知るかぎりでは、同志社出身の唯一の朝鮮人女流小説家である。同志社女学校を一九二七年に卒業し、その後一九六一年、六十歳で逝去するまで大衆小説家として

活躍した。文壇においてだけでなく、韓国最初の女性長老としてキリスト教界でも重きをなした。また、女性解放運動家としても知られている。

(1) 日本統治下の苦闘

金末峰は一九〇一年四月三日、朝鮮慶尚南道釜山市温州洞で、五人姉妹の末子として生まれた。貧窮の中で少女時代を過したが、さいわい米国人経営のキリスト教主義学校で初等課程をおえ、さらに日新女学校で三年間学ぶことができた。彼女が教会に通い始めたのはこの頃からであったという。おそらく彼女が、キリスト教という当時の朝鮮にとっては全く異質な新世界に目を開かれたのはこの頃であろう。しかし、この釜山の少女時代に日本の韓国併合（一九一〇年）という祖国喪失を体験し、その後苦難にみちた青春の彷徨の途につかねばならなかった。

彼女が一九一七年、十六歳の時、故郷をあとにしてから、京都同志社に入學するまでの遍歴のあとをたどって見よう。

眞信学校（ソウル・一九一七年～一九一九

年三月)

高根女塾(東京渋谷・一九二〇年)一九二二年)

頌栄高等女学校(東京芝区白金台・一九二二年九月)一九二四年三月)

同志社女学校(京都・一九二四年四月入学)

この転々とする学校遍歴の中に、彼女の並ならぬ向学への志が察せられるであらう。この間、彼女は三つの大きな転機にみまわれた。一つは三・一独立運動であり、もう一つは関東大震災である。

彼女は一九一九年、貞信学校卒業後、黄海道載寧にあった明信学校(ミンシン)で一年間教鞭をとったことがある。しかし、この年、全朝鮮を揺るがした民族独立運動である三・一独立運動の高揚と挫折に直面し、学問への志を新たにしようである。またこの頃、親の決めた結婚話を拒絶したこともあって、逃げるように祖国を後にして、傷心と好学へのあつい心を抱いて日本へ留学したのであった。

また頌栄高女に在学中、一九二三年九月、関東大震災の勃発にみまわれた。この時、あのいまわしい朝鮮人虐殺事件が起った。多く

の罪のない朝鮮人労働者、留学生が日本人によつて虐殺された。民族詩人李相和(イサムワ)「奪われた野に春は来るか」という詩で有名、抒情詩人金素月(ソクグク)、プロレタリア作家李箕永(イジウ)など九死に一生を得て、祖国に帰っていった。金末峰もかろうじて生き残り、翌年四月、廃虚と化した東京を去り、京都同志社女学校専門学部英文科に入学したのであった。当時の彼女の若い心は、奪われた祖国、虐げられる同族の悲劇の中で、なお学問に向わねばならぬ自己とたたかひによつて、複雑にゆれ動いていたことであらう。

当時の同志社には、『朝鮮人を想う』という文章で、日本人として当時第一級の朝鮮理解を示した柳宗悦先生などが在職し(一九一九年より大学文学部および女専の専任講師として)、大正デモクラシーと同志社リベラリズムの最後の残光が輝いていた時代であった。また、この一九二〇年代は金末峰、鄭芝溶、金煥泰という三人の秀れた朝鮮人文学者たちが、黙々と勉学にいそんでいた時でもあった。末峰が女学校で敬虔なキリスト教信者としての生活を送っている時、芝溶は大学で文学青年として詩作に没頭する日々を送っていた。二

人の交際があつたかどうかはわからない。ただ、末峰が卒業して朝鮮へ帰った後、金煥泰は大学予科に入ってきて、鄭芝溶の知遇を受け、文学的雰囲気の中で京都の生活を送ったことは知られているのだが。

彼女の同志社生活で一つ注目されるのは、宗教倫理関係の科目で抜群の成績をおさめていることである。とくにバイブルの成績がひじょうに良い。これは語学のハンディキャップにもかかわらず、彼女のキリスト教に対する並々ならぬ関心が察せられ、彼女がこの頃から、文学的人間というよりは、むしろ宗教的人間であつたことを示しているように思われる。

一九二七年三月、金末峰は同志社女学校を卒業し、帰国後まもなくして『中外日報』の新聞記者になった。女性記者としてルポルタージュや随筆を書いているうちに、社会的な目も開かれていき、しだいに文才を認められるようになった。一九三三年に文壇にデビューし、その後は堰を切ったように次々と長短編の大衆小説を発表し、大衆の人気を獲得し、大衆文学隆盛の時代をきりひらいた。

しかし、彼女のこのような華やかな文壇で

の活躍は、一九三七年を境にびったりと暮るとじられた。彼女は絶筆し、家庭の人となつた。なぜなら、一九三〇年代も後半に入ると、日本の植民地支配はいっそう狂暴さを加え、朝鮮語の新聞雑誌がしだいに強制廃刊に追いやられていった。金末峰のようなジャーナリズムを手段とした大衆小説家にとつて、これは致命的なことであつた。また、金末峰だけでなく多くの良心的な作家にとつて、もはや民族の言葉で、民族の心を十分に表現しうる文学は書けない時代になつていた。ただ、日本の植民地支配に協力する親日文学（皇道文学）だけが、幅をきかず時代になつていた。彼女の心の中に脈うつあついキリスト教信仰と、民族の誇りを保とうとする固い節操は、けつしてこのような時代に迎合することができなかつたのである。皮肉にも、組合教会の朝鮮伝道という恥ずべき歴史をもつ同志社で、キリスト教信仰を深めた金末峰は、こうして暗黒の時代の厳しい風雪をしのいだのであつた。

『韓国女性史』（梨花女子大編）は、解放前の金末峰を次のように評価している。

「彼女の信仰と堅固な志操は、日帝末期に

日帝の銃口をしりぞけて、いわゆる皇道精神とその文学に協力することなく、無言の抵抗を示したのであつた。これは後人が、仰ぎ見るべき一つの人格であると言ふことができよう。」

(2) 韓国最初の女性長老

金末峰の信仰者としての真面目は、解放前よりはむしろ解放後の活躍の中にあると思われる。解放後の祖国分断と朝鮮戦争という政治的激動の中で、彼女は教会にしっかりと足をおろし、敬虔な信仰と広い社会的関心をけつして失うことはなかつた。また彼女は、既存のキリスト教会に席をおくことよりは、むしろ開拓教会の重荷を担う道を選んだ。

一九四五年八月十五日、日本の敗戦によつて、韓国キリスト教会はその二十六年間の迫害と殉教（とくに神社参拜拒否による殉教者が多かった）の歴史にピリオドをうち、解放の喜びにひたつた。しかし、日本によつて物心両面にわたつて破壊されつくした韓国キリスト教会にとつて、その再建の苦勞は並大抵のもではなかつた。だが、金末峰は既存教会に参加するよりは、新しい教会の建設というさらに

厳しい茨の道を歩み始めた。

一九四五年十二月、ソウル中区東子洞に城南教会は成立した。彼女は創立メンバーの一人として参加し、つぶさに開拓教会の辛酸をなめた。社会的混乱と貧窮の中での伝道と教会建設の苦勞は、筆舌につくしがたいものであつたろう。現城南教会牧師である辛宗善氏は筆者あての私信の中で、解放後の彼女の教会活動を詳しく伝えてくれた。私は次に、そのあとをたどつてみる。

○一九四五年十二月——教会の創立メンバーとして参加

○一九四七年十二月——女性執事及び伝道部部長となり、伝道活動に従事

○一九四八年一月——女子伝道会会長となり、女子伝道に力をそそぐ

○一九四九年——日曜学校指導部部長となり、幼年教育にたずさわる

○一九五〇年～五二年——朝鮮戦争により、教会が釜山に移動。維持する

○一九五五年——総務部部長として奉仕

○一九五七年——韓国最初の女性長老となる

〇一九五八年——青年部指導部長となる

〇一九五九年——大学生部指導部長となる

〇一九六一年二月——逝去す

私が金末峰の教会活動を特にとりあげたのは、彼女がいかに「信徒の交り（すなわち教会ということ）」と「教会奉仕」を重視し、それを忠実に実践したかを示したからである。彼女にとって、教会生活は彼女の全生活の生命線であった。解放後の金末峰はすでに第一線の女流小説家として名声高かったが、彼女は文筆活動や社会活動（女性運動など）を理由に、教会奉仕をおろそかにすることはなかった。彼女は激しい社会的活動の中にあっても、確固として教会に足場をおき、まさに地の塩として働き続けた。私は金末峰の一生をながめる時、その華々しい社会的活躍の反面、私生活においては静謐で堅実な信仰者としての生活を貫いた姿勢にうたれるのである。

金末峰のキリスト者としての信仰は、ひじょうに正統的なものであった。それは辛宗善牧師も言うように、「長老の信仰生活は一言でいえば、絶対的な信仰の所有者のそれであ

った。長老は教会ではもちろん、家庭でも神の前における絶対的な敬虔な信仰を自ら示したのである」というごときものだった。しかし、彼女は社会から断絶し、教会の中に安住したキリスト者ではなかった。彼女が属した城南教会は、長老派の中でも、より社会的、革新的といわれるキリスト教長老派の立場にたっていた。この派はイエス教長老派に対して、聖書解釈（とくにモーセ五書の解釈）の点でも、また教会における女性の教権を認めるかどうかという点についても、より進歩的、自主主義的立場をとっていた。彼女は韓国最初の女性長老として説教壇に立ったばかりでなく、キリスト教界を代表して社会的発言もなしたのである。彼女の中で一体化したオーソドックスな信仰と深い社会的問題意識は、つねに民族の自立と教会の主体性確立という韓国キリスト教会最大の課題に対して、鋭くアプローチすることを可能ならしめたのである。

最後に彼女の具体的な信仰生活について述べておこう。教会活動については前に述べたが、さらに彼女が重視したのは「聖別」と「礼拝」であった。聖別とは、収穫の一部を神聖

なものとして區別して、神に捧げる行為をいう。彼女は月給であろうと、原稿料であろうと、また家を売って引越をするような時も、その十分の一を必ず保管しておく、主の日に教会に献げたという。彼女にあっては、自分が稼いだものも神の恵みによるものだという確かな信仰があったのである。また彼女は、教会での礼拝を重視し、主の日礼拝はもちろん、水曜夕礼拝を必ず守ったという。さらに家庭にあっても、家族そろっての家庭礼拝を欠かさなかったという。とくに彼女が熱心に参加したのは早朝祈禱会（モーニング・プレイヤーズ）で、朝の五時、教会の鐘に合わせて、祈禱をささげ、聖書研究をおこない、早朝祭壇（献金）をつんだという。このような熱烈にして敬虔な信仰生活が、明朗で忍耐つよい性格とあいまって、彼女のあのエネルギーな生き方を可能ならしめたように思われる。

(3) 大衆文学作家として

「一九三五年、長編小説『密林』を新聞に連載して、わが国大衆文学盛勢の時代をきりひらいた作家金末峰は、一九四五年解放後、倦まず絶ゆまずジャーナリズムを通じて長編

小説を書き続けた。健全な正義が必ず勝利するというモラルを身につけて、面白く読めるような精神文化を志向する信条で小説を書いた金末峰は、みずから大衆作家であることを自認して、*「純粋鬼神」*たちを痛駁したのであった。」(金容誠「韓国現代文学史探訪」)

金末峰はたいへん精力的な大衆小説家であった。解放前の五年間、解放後の十五年間の作家生活を通じて、長編小説約三十編、短編小説約四十編、その他随筆、評論など多数の作品をこの世にのこした。彼女は一貫して大衆小説を書き続け、韓国のパール・バックとよばれるほどの名声を博した。彼女はたんに創作活動をしただけでなく、解放後は韓国最初の女性作家代表として、世界芸術家大会及び国際著作権問題会議(一九五二年、スイス)に参加したりして、国際的にも活躍した。また、芸術院の数少ない女性会員(一九五七年より)の一人として活躍した。

解放前の金末峰は、一九三三年、『*亡命女*』で『中央日報』新春文芸に当選、文壇にデビューして以来、『*密林*』などの大衆小説を書き続け、一九三七年、『*野バラ*』(マルバラ)を最後に絶筆し、文壇を去り家庭の人となった。この五

年間の文学活動を通して、彼女は男女間の愛情問題をテーマとして、当時の男女関係の風俗、倫理観を活写し、一躍その名を全国に知られる女流作家となった。彼女は新聞雑誌などのジャーナリズムを通じて文学を大衆の手に解き放し、朝鮮における大衆文学隆盛の時代をきりひらいたのであった。

一般に金末峰は、解放前も解放後も通俗小説作家とみなされてきたし、また一部からはそれ故の批判も受けてきた。しかしこの点、彼女は信念をもった大衆文学者であって、高踏的な文壇文学に安住している純文学派に次のように反駁した。

「大衆文学であれば、ある程度低俗でなければならず、その低俗がすなわち大衆の趣味であると速断する作家輩がいるならば、これは大衆を侮辱することになる。大衆とは文字通り多くの民衆を意味するからである。」

解放前の朝鮮文壇には、純文学派の他にも多くの文学諸潮流が存在した。もちろん民族主義文学も存在したし、プロレタリア文学も存在した。また自然主義、人道主義、浪漫主義等々の文学理念を異にする多くのグループが存在した。しかし、これらは皆、日帝による

弾圧ということもあって、大多数の民衆からはかけはなれていった。この点、金末峰などの大衆文学が通俗小説などという批判を受けながらも、文学を大衆に近づけた意義は大きいであろう。

さらに言えば、金末峰文学の中には、通俗性とは反対に、彼女のキリスト教信仰からくる真摯な人間探究と博愛主義の精神が流れているのである。梨花女子大教授金永徳が「女流文壇四十年」(韓国女性文化論叢)所収という論文の中で、「彼女のキリスト教の信仰生活はその作品に反映されて輝いており、その信仰と堅固な志操が日帝末期のいわゆる皇道精神とその文学に感染されることもなく、日帝に抵抗しえたのである」と述べている通りである。

ここで私は、金末峰が一九三七年に絶筆し、沈黙を守った意味について述べておかなばならない。言うまでもなく、日帝治下三十二年間の朝鮮近代文学の歩みは、基本的には「抗日文学」という民族主義文学と、「親日文学」という反民族主義文学の抗争の歴史であった。とくに日帝末期には、「皇道文学」という親日文学(主として日本語によって書かれた

との闘争の歴史であった。それは朝鮮近代文学が、渾身の力をこめて、朝鮮語と朝鮮民族の文学を死守しようとする峻烈苛烈な闘いであった。金末峰の大衆文学もまた、この民族主義文学の一翼を担っていたと言ふことができよう。

この厳しい戦列の中で、わが同志社出身の文学者たちが立派にその抵抗の陣営にふみとどまったことを、私は誇りに思うのである。

尹東柱は抗日民族詩人として、最後の一瞬まで、民族の言葉で民族の心を清冽に詩いつづけた。孤高の放浪詩人呉相淳は深い宗教的信念にもとづいて、民族の覚醒をめざして闘いつづけた。また、金末峰、鄭芝濬、金煥泰は『沈黙』という抵抗によって、恥辱の親日文学を拒絶した。権力が横暴な手段によって親日文学への加担を強要してくる時、それを『沈黙』という手段によって拒絶することは、当時の状況下ではこれまた一つの立派な抵抗でありえたと言えよう。私はこれら文学者の苦闘の中に、人間としての崇高さと民族の矜持を見ることができると思うのである。

(4) 公娼廃止運動

最後に、金末峰の女性解放運動家としての面について述べておこう。彼女は女性の政治参与の問題、女性の社会的地位の問題など、多方面にわたり先駆者的役割を果たしている。とくに解放直後、彼女が中心になって起した公娼廃止運動については、どうしてもふれたい。おかねばならない。

そのまゝに、韓国における公娼廃止運動の歴史を見てみよう。解放前の朝鮮においては、数多くの婦人団体が存在し、公娼廃止をスローガンとして掲げた団体もあつたが、明確に公娼廃止を行動綱領として掲げたのは確友会が最初であつた。この会はそれまでの群小の女性団体を統一し、一九二七年五月に成立した解放前最大の女性団体であつた。キリスト者、民族主義者、社会主義者が構成メンバーとなつてゐた。この会はその行動綱領の中で、女性解放の一環として、人身売買及び公娼廃止をうたつてゐた。

確友会行動綱領

一、女性に対する社会的、法律的いっさい

の差別撤廃

- 二、いっさいの封建的因襲と迷信の打破
- 三、早婚禁止及び結婚の自由
- 四、人身売買及び公娼廃止
- 五、農村婦人の経済的利益擁護
- 六、婦人労働の賃金差別撤廃及び夜業廃止
- 七、婦人及び少年工の危険労働及び産前、産後賃金の支払

当時の朝鮮社会は、儒教道徳からくる男尊女卑思想がひじょうに強大であつた。女性は完全に男性の隷属物であつた。その中でも、娼婦は最下等の存在として、人権の一片すら認められず、悲惨な境遇に沈淪してゐた。彼女たちは日帝の土地収奪政策によって、農村から不断に供給された。日帝はその植民地政策の必然の一環として、公娼制度を維持しつづけたのである。これは現在の『妓生觀光』に連なる日本(男性)による韓国女性に対する略奪史の前身を形成するものであつた。

一九四五年八月、朝鮮は独立したが、公娼制度は依然として存続されてゐた。しかし、解放と同時に、いっせいに多くの婦人団体が結成され、女性解放運動は大きく盛り上つ

た。金末峰もまた、いちばやくそのキリスト者の立場から、廢娼運動の先頭に立った。彼女は朴順天女史(のち国会議員となる。現行の男女平等の憲法制定の立役者として有名)などと、各界各層の意見を調査し、社会の各機関に精力的に働きかけ、公娼廢止支持の説得活動と署名運動を展開した。また彼女は、文筆活動を通して、女性解放の啓蒙運動を展開した。

「新男女平等論」(民聲 五卷十号)、「公娼廢止とその後の対策」(婦人京郷 一卷四号)などの論文を通して、廢娼運動に対する世論の喚起につとめた。こうしてようやく、公娼廢止の世論が盛り上がり、ついに一九四七年、政府は十三に及ぶ諸団体の要請を受けいれ、韓国における公娼制度を廢止したのである。

しかし、金末峰は廢娼運動の最大の難問は、たんにその制度の廢止にあるのではなく、廢止後の娼婦の救済対策にあることをよく知っていた。彼女は多方面にわたり救済対策を研究したが、娼婦たちの職業保障が重大な問題点の一つであることを指摘した。そして、このために、彼女はこのような女性たちのための厚生施設と技術指導学校をかねた「博愛院」を直接経営したのである。彼女た

ちへの技術指導と職場保障が最大の救済策であることを、彼女は身をもって実践したのである。しかし、その後、公娼廢止とともに、私娼の発生というより困難な問題を韓国社会はかかえることになったのだが。

こうして金末峰は、文筆活動を通してだけでなく、自ら実践活動に参加することによって、韓国における女性解放運動史の上に、大きな足跡を残したのである。私は韓国における廢娼運動史を考える時、同時に日本における廢娼運動の先駆者たる山室重平先生のことを思いだす。日本と韓国における廢娼運動の二人の秀れた功労者が、ともに同志社に学び、ともに誠実、果敢なキリスト者としての生涯をつらぬいたことに、私は深い感銘を覚えるのである。

『韓国女性史』がいうように、「金末峰は文学においてだけでなく、韓国近代社会発展史においても、たいへん大きな業績をのこした」と言うことができよう。

参 考 文 献

(1) 朝鮮語文献

金容誠『韓国現代文学史探訪』国民書館、

一九七三年

高大亜細亜問題研究所『日帝下の文化運動史』、民衆書館、一九七〇年

金允植『韓日文学の関連様相』、一志社、一九七四年

梨花女子大学校出版部『韓国女性文化論叢』、一九五八年

梨花女子大学校出版部『韓国女性史』、一九七二年

丁堯燮『韓国女性運動史』、一潮閣、一九七一年

金炳翼『韓国文壇史』、一志社、一九七三年

『韓国文学全集十五卷・金末峰』、民衆書館、一九六〇年

(2) 日本語文献

関庚培『韓国キリスト教史』、沢正彦訳、日本基督教団出版、一九七四年

金思燁・趙演鉉『朝鮮文学史』、北望社、一九七一年

昭和四十一年大法官、同四十三年
大院修了・国立国会図書館司書